

甲斐源氏の武将

浅利与一物語

作・画
書

田中正仁
鈴木石蹤

浅利与一



浅利与一物語

◆ 与一の活躍した時代

与一の没年は、法久寺（ほうきゅうじ）にある位牌に承久三年（1223）逝年七十三歳とあり、逆算すると、久安五年（1205）生まれとなります。

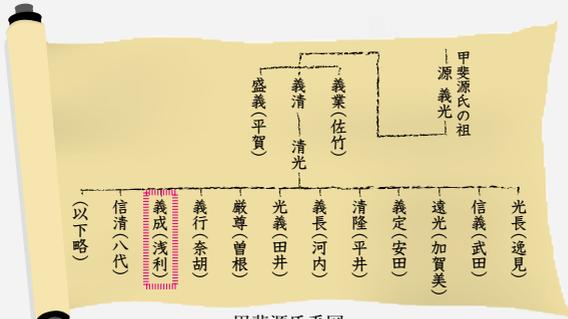
ちょうどこの頃は、政治の中心が貴族から、武家へと移行する大きな時代の変換期でした。地方で武力・財力を蓄えた下級貴族が武士となり政治を動かすまでに成長したのです。平清盛が武士として初めて太政大臣となり栄華を極め、源頼朝は源平合戦を経て、源氏を武家の棟梁とする幕府体制を確立しました。めまぐるしく繁栄と衰退が繰り返された、まさに栄枯盛衰の世の中でした。

もっぱら国内での勢力拡大に努めていた甲斐源氏もこの歴史の大きなうねりの中で頭角を現わすことになりました。甲斐源氏の一員であった与一が登場したのもこの頃です。

◆ 浅利氏の系譜

かつて浅利一帯は、笛吹川岸にアシヤオギが生い茂っていた沼沢地（湿原・湿地）でした。「甲斐国志」でも、浅利を「水ノアセテ浅ク砂ノ見ハルル処ヲ云フナルベシ」と説明しています。

浅利氏の姓は、この地域に存在した浅利郷の郷名に由来しています。浅利郷の範囲は、甲斐国志によると中央市内の豊富地区を中心に一部笛吹川右岸に及んでおり、浅利与一義成は、この浅利郷を本拠とした武将でした。清和源氏新羅三郎義光の末裔、逸見黒源太清光の10番目の息子とされますが（『尊卑文脈』）、9番目の義行は奈古十郎と称していることから、十一男の可能性もあります（与一とは、十与一を意味し、十一男以降に与えられます。十一男の信清も八代与一と呼ばれます）。



甲斐源氏系図

◆ 浅利与一

与一は、武勇にたけていること

とで知られ、『平家物語』には、壇ノ浦の戦いにおける平家方の武将との弓矢での戦いぶりが記され、那須与一と並ぶ弓の名手として知られていました。また、鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』には、源頼朝の身辺警護の列に加わっている様子が記されており、その列の中には、警備の最高責任者和田義盛や二代将軍頼家の後盾である比企能員といった有力御家人の名前も見えることから与一自身も軽んじられた存在ではなかったことがわかります。

私たちは浅利与一義成についてどれくらい知っているでしょうか。今も伝わる与一の伝説・逸話を漫画で読み、今も残る与一ゆかりの旧跡を与一マップを使い自分の足でたどってみましょう。



浅利与一

作・画 田中 正仁

うばがみ
姥神さま

ある日、与一は家来をつれて
遠馳け(馬で遠くまで馳ける
こと)に出かけた。
浅利から付近の峠を駆けまわ
り一町畑が見わたせる嶺まで
くると遠くの水田に一羽の白
サギを見つけた。



殿、
矢頃が
少し遠う
ございます

うむ



しかし、それは
白サギではなく
白い着物を着た
老婆であった。

与一主従や村人たちの
手あつい看護もむなしく
老婆は数日後に
息を引きとった...

ところが、老婆はふうの人ではなく
神に仕える身分の人なのであった。

与一や一町畑の人々は
この老婆を
「姥神」として
立派な石祠を
立てて祀った。

それからというもの
一町畑では疫病がなくなり
人々は健やかに暮らしたという。



遠矢

と
お
や

源平最後の戦い、壇ノ浦の戦い。この戦いにおいて源平の武士たちは遠矢合戦を行った。



源義経 27才



うむ
すぐに
呼べ

殿ッ甲斐源氏に
浅利与一殿が
おられます



誰か
射返せる者は
おらんのか



源氏にこれほどの
遠矢を射る者は
おるまい



うぬめ...
平氏め...
こしやくな...



与一は義経の求めに応じ
九尺(約二七〇センチメートル)
の大弓を持って敵方が
射込んだ矢よりも長い矢を
つがえ剛弓を満月のごとく
引きしぼった。
※一尺は約三〇センチメートル

一気に放った矢は
敵の大舟に向い
四町(約四三六メートル)を
一瞬にして射渡り
※一町は約一〇九メートル

この武勇により
それ以来、浅利与一は
弓の名手として
佐奈田与一、那須与一と
共に「三与一」の一人として
名を馳せた。



浅利与一 36才



新居紀四郎親清

敵船のへりに立つ武將
新居親清を射抜いて
船底へ真つさかさまに
射倒したのであった。

与一の矢文と
弓建の嶺



芦川筋どの境、桜峠の
東の尾根に後世名づけられた
弓建の嶺と呼ばれる
場所がある。

与一はこから
九一色郷、八坂(下部)の
郷士、今福伊予守と
山越しに、矢文で情報交換を
していたという。

今福伊予守



この場所から山越しに
八坂に届けたのだ。
その矢文が落ちる場所は
きまっついで
そこを矢落沢という。

先年、道路工事をした際
その辺りから数個の矢尻が
出土したという。
源平・壇ノ浦の合戦の
遠矢で平家の強者を
圧倒し「三与一」と
讃えられた義成らしい
エピソードである。



芦川から
また峠を越し
九一色郷へ



板額の嫁取り

はんがく

建仁元年(1201)、越後国(新潟県)で城小太郎資盛が反乱を起した。資盛の叔母、板額御前は「板額」に矢を射られて死なない者なし」といわれた大変な弓の名手であった。

しかし、信濃の国の「藤次郎清親」によって生け捕りとなってしまふ。。。。



この生け捕りになった板額姫に与一がひとめぼれしてしまったのだ。



將軍 源頼家

なにつ！
朝敵を妻にしたいとはどういう了見じゃ！

ははっ！

板額はなかなかの腕前男子を産すれば必ず幕府や朝廷を守る立派な武将となりましょう。



こうして与一の願いはかない、板額姫は与一の妻となったのである。



この時、与一53才であった。

妻になった板額が甲斐の国に来たのは確かだろう。

板額の墓と伝えられる塚が中道町上向山の、大宮新田の畑の一角にある。また、境川の小黒坂には板額坂という地名が残っている。



与一公が 残した文化

平家物語にも登場する弓の名手、浅利与一にちなんで建てられた与一弓道場では、毎年、弓道大会が開かれています。



浅利与一義成公顕彰弓道大会

盆の夜に盛大に打上げる花火は市内外の人を魅了しています。



与一公まつり

豊富地区で考案された郷土料理。



与一汁

道の駅とよみ内産の地元産の特産品を販売しています。



与一味工房

和太鼓の演奏は、与一の魅力を伝えるにふさわしいパフォーマンスです。



甲斐与一太鼓

与一の足跡

与一の物語は、すべてが伝説というわけではありません。中央市内には、あちらこちらに与一の活躍を裏付ける与一の足跡が残されています。源頼朝や義経と一緒に、時代の波の大きなうねりの中を生き抜いた武将が、私たちの生活するこの中央市にいたのです。

広がる田園の中を与一が歩いていたことを想像すると、はるか800年も昔の平安時代も身近なもので、歴史はつながっていることを感じるすることができます。与一が生きた足跡を巡ってさらに与一を身近に感じてみませんか？



大聖院

与一により開創された時は、山号を浅利山と称しましたが、現在は東花輪に移り恵日山となっています。かつての所在地には大聖院旧跡を示す石碑が立っています。

姥神さま

与一が誤って射ってしまった老婆を祀った石祠は、かつては笛吹川添いの工業団地内に祀られていたようですが、現在は一町畑の諏訪神社裏に移されています。

諏訪神社

浅利の諏訪神社には与一が寄進したという、矢の根石、桃形水盤、船石と呼ばれる石造物が残されています。境内には、弓道場が併設されています。

法久寺

法久寺は、もともと「宝弓寺」と呼ばれ、与一の没年が記された位牌が祀られてきました。山門脇の山腹には与一の墓と伝わる墓石が祀られています。

与一館跡

「甲斐国志」には「七蔵」に与一の館跡があると記されています。浅利の小字七蔵の山腹に平坦地があり、与一館跡と推定されていますが詳細は明らかになっていません。

与一層塔

与一の墓と伝わる層塔は高さ3.15mもあり、両側には浅利氏一族の墓とされる五輪塔が並びます。

弓建嶺

与一が一町畑の白サギにむけて矢を射ったのはこのあたりで弓建嶺と呼ばれています。石祠が祀られ、今でも毎年、大鳥居地区の人々がお参りをしています。

大福寺薬師如来坐像

大福寺聖観音菩薩

大福寺は、与一により伽藍が修復されたといわれ、その縁か、与一の位牌も祀られています。平安時代から鎌倉時代にかけての仏像がいくつも残されており、与一の活躍した時代と重なることから、与一が実際に拝んだ仏像も含まれているかもしれません。

浅利与一関係略年表

区分	西暦	年号	甲斐源氏・浅利与一などの動向
平安後期	1110	天永元	源清光常陸国で誕生
	1131	天承元	4月 義清・清光は甲斐国へ配流(信義3歳)
	1140	保延6	信義元服し武田氏を称す
	1149	久安5	源義清没75才 浅利与一誕生か
	1156	保元元	保元の乱
	1159	平治元	平治の乱(後白河法皇・平清盛勝利、源義朝敗死・頼朝流罪)
	1167	仁安2	平清盛太政大臣 翌仁安3年(1168)清光没
源平合戦	1180	治承4	4月 以仁王平家追討の令旨 8月 石橋山の戦い 10月 富士川の戦い(甲斐源氏の参戦)
	1181	治承5	閏2月 平清盛没
	1184	寿永3	正月 木曾義仲征夷大將軍に
	1184	寿永3	甲斐源氏木曾義仲討伐に活躍
	1185	元暦2	2月 屋島の戦い 3月 平氏壇ノ浦に滅ぶ(浅利与一遠矢の活躍)
	1185	文治元	全国に守護・地頭を置く
	1189	文治5	4月 奥州合戦 浅利与一参戦 義経自刃 奥州藤原氏滅亡
鎌倉前期	1192	建久3	3月 後白河法皇崩御 7月 源頼朝征夷大將軍 鎌倉幕府
	1199	正治元	1月 頼朝逝去53才 頼家2代將軍となる。
	1201	建仁元	4月 越後鳥坂城主城氏反乱す。 5月 板額御前生捕られる。 6月 与一が板額御前を貰い受ける。
	1203	建仁3年	北条時政將軍頼家を幽閉し実朝を3代將軍とする。
	1219	承久元	正月 3代將軍実朝鶴岡別当公暁に暗殺される。
鎌倉中期	1221	承久3年	5月 承久の乱 甲斐源氏武田信光・小笠原長清・ 浅利太郎 等参戦 9月 浅利与一死去 73才
	1226	嘉禄2	5月 奥州白川の関で騒動が起き、 浅利太郎などが鎮圧

(加藤正之氏の資料より一部転載)

今からおよそ800年前の源平合戦の時、壇ノ浦の戦いで約400m先の平氏の武将を射倒した浅利与一は、現在の中央市浅利に本拠地を置き、鎌倉時代には甲斐源氏の武将として大活躍をしました。

1. 本物語は中央市広報紙2013.1“文化財と歴史を訪ねて第78話”の転載です。
2. 表紙イラストは田中正仁氏、「浅利与一」書は鈴木石蹤氏せきしよつによる。